

目指せ！筑波山地域ジオパーク！

ジオパーク(Geo Park)の「ジオ(Geo)」は、「大地」や「地球」という意味。筑波山地域6市が連携してジオパークの認定を目指しています。



2億年をさかのぼる石岡市の大地の物語を訪ねる歩き書きのシリーズ。全8回の連載です。

いしおかの大地を歩く

第1回

舟運の街と古代の入江

(高浜)

高浜は、鉄道開通前はこの辺り一番の市街地であった。家並みはかつての繁栄を垣間見る。盛んな舟運で高浜は栄えていた。それは古代までさかのぼる。高浜は国府の外港となっており、常陸國總社宮に伝わる場所では、波が荒れて国司が鹿島神宮に出航できないときに高浜の浜辺にマコモなどで祠をつくり遥拝した。その地が現在の高浜神社(①)であるという。堤防沿いに東に進めば恋瀬川河口に今は少なくなったヨシやマコモが残っている。野鳥の姿も多い。高浜公民館前には高浜河岸の解説板(②)がある。舟で西浦や恋瀬川から利根川を経て東京まで通じており、周辺の物資の集散地として発達していた。古い石積みや煉瓦が繁栄を教えてくれる(③)。銚子の砂岩が使われているところがあり、舟での交流が伺える。公民館側の通りが明治以前の湖岸に当たる。

高浜では米、小麦、大豆、塩などの物資が集まり、製品の積み出しにも良く醤油や酒の生産が盛んに行われていた。今でも清酒や味噌の製造(④)が行われる。市街地は北側の台地の斜面に沿って発達しており、古い寺社もある。爪書き阿弥陀堂(⑤)は親鸞伝説の地である。その裏側の急な階段を登ると墓地の入口から高浜を一望できる。湖や水田は縄文時代は海であった。波は台地を削って自ら海を広げていった。そのため湖や谷の広いところに面して急崖が多い。縄文の海は恋瀬川の谷に沿って染谷の辺りまで入り込んでいた。周辺に縄文文化が花開く。次第に川の運ぶ土砂が谷を埋めていった姿が今の広い田んぼである。最後は干拓で残った湿地が美田に変わった。田んぼの中には家はなく、軟弱な泥が深い谷を埋めているため建物には不向き。一方、似たような地形の土浦は市街地化が進んでいる。桜川に沿って砂の微高地が発達し、3万年前まで流れていた鬼怒川が、厚い小石の層を地下に残しているためである。この生い立ちの差が高浜にすばらしい風景



▲高浜駅周辺案内図

を残してくれた。高浜の市街地は斜面に沿うようにあり、地下に海の削り残し(波食台)が埋もれていて比較的土壌が安定している。台地の上には古墳が多数あるが塚が崩れて分かりにくい。道から高浜小学校校庭を見ると、出土した石の棺が保存されている(⑥)。学校の西側には塚が残っている。小学校の下は藤森稲荷(⑦)境内には台地をつくっている締

導員 矢野徳也

文 環境省委嘱 自然公園指

またた泥層が観察できる。この泥層が波に抗して馬の背のような台地が残った。常磐線の深い切り通しの地層から以前に海の貝の化石が見つかっている。かつての鹿島街道は稲荷の学校の間の道だ。踏切を渡って西に登れば東日本2位の大きさの舟塚山古墳(⑧)を中心とする古墳群がある。